

北海道チョウザメの博物誌 3

—煙草入れ（カハコモ）はどのチョウザメ皮で作られたか？—

Natural history of the Hokkaido sturgeon 3

Which type of sturgeon skin is tobacco pouch (kahakomo) made of ?

石橋 孝夫*

Takao ISHIBASHI*

要 旨

旭川市立博物館にはサハリン島で採取された煙草入れ（カハコモ資料番号4509）が収蔵されている。この資料はチョウザメ皮製とされているがどの種のチョウザメであるか、不明であった。昨年、天塩川上流の美深町でミカドチョウザメの剥製が保存されていることが判り調査を実施した。さらに市立函館博物館所蔵の剥製との観察なども加味すると、旭川市立博物館に煙草入れはミカドチョウザメの皮で作られた可能性が高いことがわかった。またカハコモと同型のサハリン島あるいはクリル諸島採取で表面に同様の文様のある皮革製品は国立民族学博物館と東京国立博物館にもあるが、これらについても、ミカドチョウザメ皮が使用されていると考えられる。関連して『鮫皮精義』の「蝶鮫図」，「栗氏魚譜」に描かれたチョウザメもミカドチョウザメの可能性が高い。

キーワード：カハコモ，ミカドチョウザメ，樺太アイヌ

1. 旭川市博物館のカハコモの皮は どのチョウザメか？

山本佑弘（1970）「樺太アイヌ・住居と民具」によると樺太アイヌの煙草入れは「皮製＝カハコモ」「木製＝オトコホペ」という。

旭川市博物館所蔵資料には登録番号4507と4509（図1）の2点の「カハコモ」があり1点は皮製であるが動物か魚であるか不明である。登録番号4509のほうに「チョウザメの皮」という記載がある。この資料は拙稿北海道チョウザメの博物誌1（石橋，2015）で取り上げたものである。しかし筆者には何の根拠でチョウザメ皮としたのか不明のため疑問を表した。

この資料は戦前、北海道考古学の先達河野広道が当時の樺太（現在のサハリン）で採取したもので、使用または所持していた民族は呼称からみて樺太アイヌと思われる。この煙草入れは身と蓋の

二つの部分からなり四隅が渦巻き状に丸めた独特な形状をしている。また身、蓋の表面には粒状の突起が無数にあり、ザラザラした手触りとなっている。後に述べるようにこの種の資料の名称は「煙草入れ」ばかりでなく「発火具入れ袋」などの名称もあり一定していない。

旭川市博物館の「カハコモ」の表面には幅1～3mmほどの白っぽい凹凸が全体にあり、文様のように見える（図2）。この凹凸は3に述べるようにチョウザメの体表の粒状の突起が摩滅（髹しの結果？）したものと考えられ、本来は図4，5で見られるような粒状の突起が摩滅してこの形態になったと思われる。

また、今回調べた範囲では名称は異なるが、旭川市博物館所蔵品カハコモと同型品で表面に同様の文様がみられる資料は国立民族学博物館、東京国立博物館（齋藤玲子氏の教示による）の2館にも収蔵されている。これらの資料は採取地をみると

* いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

サハリン島，クリル列島である。

一方このような「カハコモ」様の資料は近世の絵図『蝦夷カラフトサンタン三カ所打込図諸道具図』（小林，1792）の中にもみられる。描かれた図の表面には皮表面の凹凸を表現したと考えられる点描が描かれており，旭川市博物館の「カハコモ」と同じ種類のチョウザメ皮製の可能性がある。絵図の付け紙には「ヲツクラチ（チョウザメの意）」という注記があり，チョウザメ皮製であることは間違いがない。

2. 国立民族学博物館と東京国立博物館所蔵の「カハコモ」類似資料

すでに述べたように旭川市博物館所蔵品4509と同型でしかも表面に特徴的な凹凸がみられる資料は国立民族学博物館に1点，東京国立博物館に3点ある。

国立民族学博物館資料

「標本番号K0002359，標本名発火具入れ袋（火打ち入れ袋），地域クリル列島（千島），民族クリールアイヌ；Kuil Ainu 千島アイヌ。」

この資料は「発火具入れ袋」つまり火打石入れに使用されていたらしく，また皮の原材料の名前は記されていない。この資料については北海道博物館の「夷酋列像展」で実見した。なお同展目録「夷酋列像 蝦夷地をめぐる人・物・世界」の資料解説で右代啓視（2015）は「千島アイヌの火打ち道具入れ，鳥居龍蔵が1899（明治32）年の千島調査で収集したものと考えられている。身と蓋はともにチョウザメの皮で作られ」と書いている。

東京国立博物館所蔵資料

次に東京国立博物館の所蔵資料を見てみよう。これらの資料は『東京国立博物館図版目録アイヌ民族資料編』（東京国立博物館，1992）掲載されている。同書によると

①「27384 巾着 使用民族：樺太ウイльта 鮫皮製 付属紙片に「ヲロッコ人火打道具イレナリ 函館ニ

テ得」

②「27869 燧袋 使用民族：樺太ウイльта 鮫皮製」となっている。

この2点は旭川市博物館所蔵品4509と同型のもので身と蓋の表面には同じ凹凸がみられ同種の皮が使用されていると判断される。また同館には形は違うが①②と表面に同じ特徴を持つ皮製の燧袋③がある。

③「27781 燧袋 使用民族：樺太ウイльта 鮫皮製」

東京国立博物館の「カハコモ」と同型品と若干形態の異なる皮製の袋はいずれも「鮫皮製」となっているが少なくとも3点には旭川市博物館の「カハコモ」と共通する特徴（図2）がみられる。なお，「鮫」は「チョウザメ」の意味でも使用されることがあり，本来，「チョウザメ」の意味で付けられた注記の可能性があるだろう。

3. 旭川市博物館カハコモおよび同型の民具はどのチョウザメ皮で作られたか？

2015年，名寄市北国博物館の鈴木邦輝氏から美深町で新たなチョウザメの剥製が見つかった連絡があった（鈴木，私信）。早速，美深町に資料調査に行ったところ体長1.5mのミカドチョウザメと考えられる剥製が確認できた。剥製の収蔵経緯は鈴木邦輝氏が調査中であるが，おそらく美深町を流れる天塩川で捕獲されたものとみられる（図3）。

この剥製の表面には硬鱗（鱗板）のほか特徴的な粒状突起がみられる。細かくみると1mmほどの粒が2～4個集まっており，これが摩滅している部分は旭川市博物館の「カハコモ」の表面の模様と極めて似た形状もみられた（図4）。

また市立函館博物館で常設展示されているミカドチョウザメ（明治13年函館市湯の川沖で捕獲）にも（図5）美深町の剥製と同じく粒状の突起がみられた。

図6は石狩市観光センター（ゆめぼーと）に展示されているダウリアチョウザメ（2004年5月石

狩川河口捕獲)の背中部分であるが、確かに肌理が粗くザラザラしているが前記2例のミカドチョウザメのような大きな粒状の突起はみられない。石狩市いしかり砂丘の風資料館にあるダウリアチョウザメの剥製(1969年9月石狩川河口で捕獲)も体表の状態は同様である。

以上のような剥製の表皮の観察と資料表面の比較から旭川市博物館4509、国立民族学博物館の標本番号K0002359は共にミカドチョウザメの皮から製作されと考えられる。

さらに図7に示した国立民族学博物館所蔵の小刀鞘(k0002580)は、硬鱗(鱗板)と粒状突起の双方が同時に観察できる資料で、ミカドチョウザメ皮を利用した典型例としてあげられよう。本資料も樺太の西海岸で樺太アイヌが使用していたものとされる。また東京国立博物館所蔵の27384、27869、27781の「鮫皮製」とされる3点の資料もその特徴的な粒状突起及び資料採取場所が「樺太」という点から、ミカドチョウザメ皮が使用されているといえる。

また関連して『鮫皮精義』(稲葉, 1785)にある「蝶鮫図」を拡大してみると硬鱗(鱗板)とは別に細かい点が描かれている(図8)。同様に栗本丹州の「栗氏魚譜」(栗本, 成立年不明)に描かれたチョウザメにも共通する表現がみられ、これらはミカドチョウザメの体表の粒状突起を描いたものと判断され、近世「蝶鮫」と呼ばれた種はミカドチョウザメだったのではなかろうか。

なお、『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』(SPb-アイヌプロジェクト調査団, 1998)チョウザメ尾部の鞘がある。資料番号「MAE 700 107」には「с ножны из хвоста калуги (рыбы)」=ダウリアチョウザメ(魚)の尾で作った鞘、採取地サハリン西海岸、マコウ村、もう1点の「MAE 811 13 a・5」も「Нож в ножнах из хвоста калуги」=ダウリアチョウザメの尾で作られた鞘入りナイフ、採取地は北海道」という注記がある。この2点が今のところКалуга=ダウリアチョウザメの利用の確実な

例である。1点は北海道内で採取とあるが、北海道アイヌが製作したかどうかは不明である。

謝辞: 本稿を作成する際、次の機関、個人から多くのご協力、ご教示を賜った。末筆ながら芳名を記して感謝申し上げる。国立民族学博物館、旭川市立博物館、市立函館博物館、美深町、小林貢、齋藤玲子、鹿田川見、鈴木邦輝(敬称略)

引用文献

- 石橋孝夫, 2015. 北海道チョウザメの博物誌1—遺跡、地名、絵図、民具からみた北海道チョウザメの記録—いしかり砂丘の風資料館紀要, 5: 53-65.
- 右代啓視, 2015. 夷酋列像 蝦夷地をめぐる人・物・世界. 北海道博物館開館記念特別展図録「夷酋列像」展実行委員会, 北海道新聞社.
- 山本佑弘, 1970. 樺太アイヌの民具. 樺太アイヌ・住居と民具, 相模書房.
- 東京国立博物館, 1992. 東京国立博物館図版目録アイヌ民族資料編.
- 小林豊章, 1792. 蝦夷カラフトサンタン三カ所打込図. 早稲田大学貴重書ライブラリー.
- 稲葉龍通, 1785. 鮫皮精義. 九州大学附属図書館, 九大コレクション.
- 栗本丹州, 成立年不明. 栗氏魚譜(巻12). 国立国会図書館デジタルコレクション.
- SPb-アイヌプロジェクト調査団編, 1998. ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録. 草風館.



図1. カハコモ（旭川市博物館蔵）.

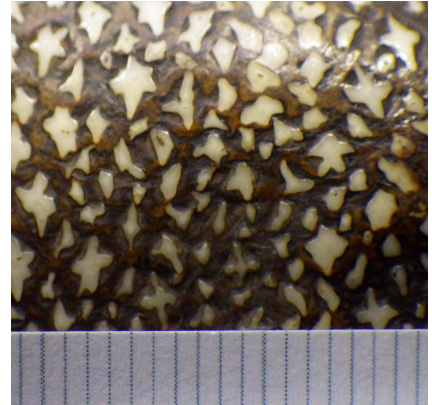


図2. カハコモの拡大.



図3. 美深町のミカドチョウザメ剥製.



図4. 図3の拡大.



図5. 市立函館博物館のミカドチョウザメ剥製胴部側面.



図6. ダウリアチョウザメの背の部分.



図7. ミカドチョウザメ皮製小刀鞘.
(画像提供:国立民族学博物館提供)



図8. 『鮫皮精義』蝶鮫図の拡大.